

表題『』

はじめに [REDACTED]。

~~~~~

その地は一面の白で覆われていた。人の膝ほどまである霞が降り注ぐ太陽の陽を反射し、目に入るすべてを白銀の輝きの中に覆い隠している。遠くの方に、切り立った岩肌が白い地面から突き出ているのが見える。それはこの世で最も高い山の頂だった。ここは雲の上なのだ。入道雲の頂上に、虹色の神殿が立っている。神殿の外側に規則正しく並ぶ円柱は、まるで巨人の肋骨のようだ。神殿の大広間には、天上に住む人々——この時代の人間は、彼らを"神"と呼んでいる——が並んでいた。雲の上から見える須くを統べる彼らは、それぞれ愛、戦争、知略、伝令、婚姻……そして中央の王座には、雷を司る主神が座っていた。

ヒルコは、鍛冶の神の背後に控えている。彼女は白い布で頭を覆い、その顔貌のほとんどを前髪で隠していた。垣間見える肌は浅黒く、この場にいる神々の溢れんばかりの血色が透ける肌からすると、まるで薄汚れた雑巾のようだ。この白の世界で、自分だけが黒い染みであるようにヒルコは思っていた。

醜女の顔を上げさせたのは、芳香だった。形容しがたい、複雑で、しかし洗練された香りに、ヒルコの視界は開かれる。

"彼女"が神殿の階段を登る。神殿は彼女を拒まない。まるで体内に招き入れているかのようだ。彼女は美しい。彼女の光は、ここにいる神々のどれよりも優しく、穏やかで、しかし鮮やかな光を放っている。

彼女は麗しい、しかし気取らない所作でもって玉座の前に跪く。乳白色のキトン彼女の肌に重なることを誇るかのように、重力に逆らってふわりと浮いた。

「おお、[REDACTED]よ。[REDACTED]よ」

雷神は叫ぶように声を上げた。彼女は動かない。跪(ひざま)いたまま雷神の声を聞いている。

「貴殿を呼んだのは他でもない。近頃ニユンペたちを騒がせている化け物のことじゃ。瘴気と狂気に満ち、見るものを狂わせ、この世を混沌に墮す化け物が潜んでいると。そして忌々しい巨人族どもが噂するところによれば、『"それ"は、我らよりも前にこの地に降り立ち、我らよりさらに頭上の世界を統べるものである』と……」

だと彼は笏を打つ。それは落雷のように宮殿を揺らす。

「そんなものがあってはならぬ！」

雷神の癩癩のあと、神殿には空虚な静寂が残った。"彼女"以外の誰もが、この雷神を恐れ、そして軽蔑している。雷神が顎でヒルコを指し示す。ヒルコは神々の列から一步出て、彼女の左後方に跪(ひざまづ)いた。"彼女"の瞳が少しだけ自分に向けられ、ヒルコの灰色の頬に朱が入る。それを見破られないように、ヒルコは顔を伏せたまま声を上げた。

「貴女にこれをお渡しできるのを、私は生涯、心待ちにしておりました」

神々が目を細める。ヒルコは、どんな美しい神よりも"彼女"に心酔している。取るに足らない醜い工夫のやることとはいえ、その明け透けな態度は神々の聾聾を買った。ヒルコもヒルコで、愚かで高慢ちきな神どもにどう思われようが知ったことではないと思っていた。

ヒルコが差し出したのは、鳥籠の中に入れられた金の梟(ふくろう)だ。額や翼の根元のネジの部分に宝石があしらわれている。機械仕掛けのそれは振り子のように首を左右に傾けながらも、彼女から視線を外すことはない。

「それは、あなたの旅の案内を務めるものです。あなたが道に迷うと断じて思っておりませんが、無用の迂回路(まわりみち)をさせることも世界の損失となりましょう。至らぬ発明ですが、ご笑覧ください」

"彼女"が許すと、梟は檻から飛び立ち、彼女の掌(てのひら)に止まった。振り子のように首を傾けるそれに、彼女は頬を綻ばせる。自分の作ったものが、彼女の瞳に入り、像を結び、見とめられている。そのことにヒルコは恍惚を感じた。

「気に入ったようではないか」

雷神の言葉に、ヒルコの愉悦は妨げられた。彼は高慢な笑みを浮かべ続ける。

「この務めを果たした時には、我が領地、財宝、奴隷、いずれも恣(ほしいまま)にするつもりだったが……貴殿を喜ばせるには、こちらの方が良いかもしれぬ」

雷神が手を叩くと、侍従たちが身の丈の2倍ほどある檻を運んできた。それにはシーツがかかっており、中を認めることはできない。しかし、中に入っている何かが箱を揺らしている。彼女は怪訝に眉を顰(ひそ)める。

「此奴は、我らが征服した土地の奥に棲んでいた獣じゃ。これの一族を狩るために、何柱もの無名の神の命を費やした。最後は、ここにいる十二柱総がかりじゃ。生け捕ったはいいいものの全く懐こうとしない。正直持て余しておってな。丁度、此奴の皮で新しい外套を作ろうと思っていたのだが、職人が腕を噛み千切られてしまったのだ」

布が剥がされ、檻の中が露わになる。そこにいたのは雌獅子であった。頭には鹿の角が聳り立ち、背中には白鳥のような清らかな翼が生えている。しかしその体軀には無数の傷があった。矢で貫かれ、槍で突かれ、槌で打たれて、傷口は紫に膿んでいた。角は手折られ、翼はひしゃげ、また四つ脚は鎖に繋がれ、まるで蛙のように吊るされている。

猿轡で固められた口の間には、雌獅子とよく似た毛並みの、小さな仔獅子が置かれていた。ぴくりとも動かない仔獅子の首には、縄で絞められた跡がある。雌獅子の目元には、乾いた血涙の跡があった。

「貴殿が怪物を討ち果たした暁には、このけだものをくれてやろうぞ！」

"彼女"の目が開かれる。瞬間、波が神殿を飲み込んだ。

玉座は瞬(ゆ)く間に流され、それに座っていた雷神も最初からいなかったかのように消え失せた。十二柱の半分は自らの主(あるじ)と運命を共にし、もう半分は波の中から現れた海獣の口の中に吞まれた。海獣は猪の牙と蜥蜴の爪、そして鯨(しゃち)の鰭でもって神殿の支柱を薙ぎ倒した。飛んで逃げようと翼を広げた一柱は、地面から足を離れた瞬間に滝のような雨に打たれ、大理石の床に叩きつけられた。這いつくばる彼の身にも雨は容赦なく降り注ぎ、骨の碎ける音が断続して、やがてぴくりとも動かなくなった。口から溢れる緑の血は神殿の階段を流れ落ち、いつしか消えてしまった。

ヒルコは腰から下を円柱に潰されていたため、神殿に留まって最期まで"彼女"の姿を認めることができた。彼女は押し寄せる波より高く飛び上がり、ひらりと身を宙に舞わせて手元に流れてき

た雷神の王笏を手にとった。そしてそれを彼女に向かわんとする海獣の瞳に突き刺した。海獣の魚類のような瞳が見開かれ、悲鳴が上がる。さあと波が引いていく。海獣から噴き出した血は引き潮とともに洗われて、あとには"彼女"と金の梟、そして囚われていた四つ脚のけだものが残された。けだものの足からはいつの間にか鎖が外れており、けだものは喉を鳴らして彼女に首を垂れた。

ヒルコはその光景を見つめ、幸福のうちに息絶えた。

~~~~~

金の梟は触手に絡め取られていた。巨鳥の頭は磯巾着のようで、その翼の羽ばたきでもって谷間に砂嵐を起こしている。怪鳥の趾足(しそく)には、大きな皮袋を背負った女が捕えられていた。

"彼女"は、谷間の底で怪鳥を見据えていた。彼女の頭には青銅の兜があり、また黒い手袋で覆われた手には金剛の鎌が握られていた。彼女がサンダル——金色の羽があしらわれている——でもって地面を蹴ると、その身は軽やかに飛び上がり、つむじ風が起こった。風は土埃を引き裂き、怪物への道を作る。振り上げた鎌がキメラの首を捉え、切り離した。怪鳥は絶命し、重力のままに谷間に落ちる。その鉤爪から逃れることができた女も、同じように落下する。彼女は空中でその女の腰を抱き抱え、再び宙を蹴った。谷間にこだまする墜落音を背に、彼女たちは谷間の淵に着陸した。

女が背中から荷物を下ろすと、その口から宝石が零れ落ちた。女はハールーンと名乗り、谷間でルビーやサファイアを採っていた時に怪鳥に襲われたのだと言った。

「ありがとうございます。その、失礼を承知でお伺いしますが.....あなたは[REDACTED] [REDACTED]ではありませんか？それとも[REDACTED]？」
『いいえ、イエエ！その名の神はどちらも、オリュンポス山で怪魚に喰われてしまいました！』

ハールーンの問いに答えるのは、同じく怪鳥の腕から逃れた梟である。その金色の体には無数の傷がついており、あしらわれた宝石もところどころ剥がれてしまっている。

『ここにいらっしゃるのはそのどちらでもありません。ここにおわすは[REDACTED] [REDACTED]、七つの海を渡り九つの街を治めた[REDACTED]、そして唯一無二たる.....』

梟の言葉を、"彼女"は苦笑し静止する。やめてくれ、ということだろう。

「ああでも、これでこの谷の巨鳥伝説も終わりね。この土地に最後に残った怪異だったのに」
『それは、私たちの怪物退治の旅が、終わりに近づいているということでしょうか、ご主人？』

"彼女"は首を傾げる。梟の問いに、ハールーンは声を張って応える。

「そのとおり。もう神話の時代は終わりなんです。これからは人類(わたしたち)の時代。剣と宝物、法と古典、秩序と戦乱、産めよ増えよ殺せよ奪えよの混沌の時代です。その遺物であるあなたのその金のペットも、恐らくもうすぐ朽ち果てるでしょう。でもあなたはまるで、失われた神々の楽園や巨大な四角錐の時代、いや、それよりもっと原初の時代から飛び出したみたいだわ。ねえ、金の林檎を見たことはある？」

"彼女"は柔らかく微笑み、その女の問いに答えた。彼女が口を開くたび、まるで花の蕾が開くように空気が華やいで、ハールーンはさらに頬を上気させた。

~~~~~